

なべさん

2024.2.4

なべさん、焼肉屋さんではない。なべさんと呼ばれている人の話である。

私は、イタリアから戻り、新たな学校に赴任した。30代後半だった。学級担任となった。その学級に、小学校を卒業したばかりのあどけない一人の少年がいた。なべさんである。このときは、まだ、この先、これほど長い付き合いになろうとは、お互いに知る由もなかった。

中学2年生でクラス替えとなった。新たな学級を担当することとなった。その学級に、また、なべさんがいた。この時点で、彼は3年間、私の学級になることがほぼ確定した。中学校の3年間を通して、幸か不幸か、担任の先生が、たった一人という状況になることが決まった。

まだある。彼は、ソフトテニス部に入った。テニスコートに行くと、担任である私がいた。ということは、3年間にわたり、彼にとっての学級担任、部活動顧問、国語の教科担当は、私一人だということである。彼の成長にとって、かなりの責任を負うべき立場にある人間である。このパターンに当てはまった生徒は、彼一人である。学年8クラスもある学校だった。どのくらいの確率の話になるのだろうか。

彼は、国語の授業でも部活動でも、よくやっていた。努力のできる人だった。とりわけ、部活動に対する意欲、ソフトテニスにかける情熱はものすごかった。いつも熱心に練習していた。試合でも、よく声を出し、全力でプレーをしていた。応援したくなる選手だった。負けても、よくがんばったと拍手を送りたくなる選手だった。

大会では、彼の望むような、目指すような結果は得られなかった。6月で部活動を引退した。高校に行っても続けることはわかっていた。進路のことを考える時期となった。彼が相談にきた。「〇〇高校に行って、ソフトテニスを続けたいんです」問題は、〇〇高校である。全国に名をとどろかせるような強豪校である。全国大会で優勝するような学校である。そこに行きたいという。

やめた方がいいと助言する人もいるだろう。だが、私は違った。「本気なのか。レギュラーになれるかわからないぞ。辛く苦しいことが待っているぞ」あ那时的彼は、高いレベル、厳しい環境に身を置いて、自分を鍛えたい、挑戦したいという思いだったのだろう。

〇〇高校の監督さんに電話をした。彼のことを説明した。実績がないと受け入れてくれない学校もある。だが、この監督さんの考えは違った。たとえ、結果を出していない選手でも入れてくれた。なぜなら、高校に入ってから伸びる可能性があるからである。実際、この高校では、中学のときには活躍できていない選手が、全国の舞台で結果を出している。こうして、なべさんは、県外にある〇〇高校ソフトテニス部の一員となった。 (次号に続く)